

大障教ニュース

大阪府立障害児
学校教職員組合
大阪市天王寺区
東高津町7-11
府教育会館704号
(TEL)6765-8904
(FAX)6765-8905

直ちに支援学校の増設を! 当たり前の教育条件整備を求めて保護者・関係者が訴え

要求大集会実行委員会

対府交渉（教育分野）

7月9日、10日、12日、大障教・障連協（障害者（児）を守る全大阪連絡協議会）などで構成する「障害者・家族・関係者要求大集会実行委員会」は、教育分野に関する対府交渉を大阪赤十字会館で行いました。交渉には、支援学校・支援学級の父母・教職員や、障害当事者、施設職員などが多数参加しました。参加者は、「基本方針」の抜本的見直しと新たな支援学校建設計画の策定や、安全・安心な通学保障、支援学級の施策の充実など、障害児教育の条件整備を求めました。主なやりとりについてお知らせします。

学校建設・通学区域割問題

府教委は、「大阪市立特別支援学校12校を大阪府に移管したことを受け、大阪府域を含む府内全域の支援学校の知的障がい児童生徒数の推計を実施し、この推計を踏まえ『府立支援学校における知的障がい児童生徒の教育環境の充実に向けた基本方針』を策定し、引き続き基本方針に基づく取組みを順次すすめていく」と回答しました。

これに対して参加者からは、「支援学校通学に1時間かかる」「来年度から転学される学校の校地が狭く、そこに児童を押し込めることに大きな疑問がある」など、新たな通学区域割変更が示さ

安全・安心のスクールバス運行

スクールバスの民間委託化方針の撤回を求める要望に対して府教委は、「直営バスと同等の成果をあげていることや、他府県における実施状況から

発する事故の実態が出され、民間委託化の破たんや安全・安心の直営でのスクールバス運行を訴えました。保護者からは、「学校におけるスクー

ルバスでの事故の連絡や対応が不適切であるために、保護者は事故に対する大きな不安を抱いている」という発言もあり、学校からの事故等の連絡については保護者に適切に周知されるよう強く求めました。

保護者からは、「学校におけるスクー

専攻科の設置など後期中等教育拡充

支援学校高等部に専攻科の設置を求める要望に対して府教委は、「視覚支援学校、聴覚支援学校以外の府立支援学校に専攻科を設置する予定はない」と回答しました。参加者は、全員就労を求める学校で追い込まれる生徒の実態とともに、高等部卒業後すぐに社

会人として自立させようと無理をさせることの問題を様々な観点から訴え、府教委の責任で専攻科の設置をすすめるよう求めました。また、福祉型専攻科や卒業後の学びの場の存在と役割が、すべての府立支援学校の生徒保護者に広くいきわたるよう、支援学校への指導・助言を求めました。

寄宿舎教育の継続・発展

中央聴覚支援と大阪北視覚支援に設置されている寄宿舎について、府教委は「今後、入舎状況や児童生徒のニーズ、施設の状態を踏まえて検討していく予定」と回答しました。現場の寄宿舎教員は、片道一時間以上の通学時間に加え週4泊を原則とする府の入舎基準に対して、「大阪府への移管

によって入舎基準が変更されたのか」「二人ひとりの状況に合わせて柔軟に入舎を認めるべきではないか」などと訴えました。府教委は「通学保障が寄宿舎設置の目的である」との答弁に終始しながらも、「特別の事情のあるケースはいっしよに検討していく」と述べました。



後輩の女性が入籍したと報告に来た。おめでとう！。これから様々なことを得る人生を彼と歩み続けることを願うばかりだ。また、得たことを自身の力にし、それを民主的社会的形成に還元できる生き方を選んで欲しいと思う。

愛する人ができれば、結婚するかどうかは別にし、人生をともに歩みたいと願うことは自然なことだ。さて、十年ほど前に読んだ本に「愛は技術。修練が必要。」と書いてあった。ここで笑ってしまった読者は、結婚生活に少し疲れている人かも。その本はエーリッヒ・フロム著「愛すること」。

フロムは、「自分の人格全体を発達させ、それが生産的な方向に向くよう、全力をあげて努力しないかぎり、人を愛そうとしても必ず失敗する。満足のゆくような愛を得るためには、真の謙虚さ、勇氣、信念、規律をそなえていなければならぬ」と指摘する。

教師は子どもを愛することを義務付けられた職業だ。フロムの言葉を借りれば、「子どもを愛するためには修練が必要」となる。「ババア、うざいんじゃ」「死ぬ。失せろ！」と暴言を吐き、喫煙、暴力行為などの問題行動を繰り返す生徒をあなたは愛することができますか？

自分より自分自身を愛してくれる人との出会いは、生涯の宝を得ることだと思おう。フロムは「人間のもっとも強い欲求とは、孤独の牢獄から抜け出したいという欲求である」と指摘する。そして、「愛とは、孤独な人間が孤独を癒そうとする営みであり、愛こそが現実の社会生活の中で、より幸福に生きるための最高の技術である」と言う。(久)

国の責任による少人数数学級の前進、支援学校・学級の抜本的増設を

全ての子どもたちにもゆきとどいた教育を求める教育全国署名

2019年度

大阪スタート集会

教育相談活動から見える子どもたちのねがい

教育全国署名をひろげよう

7月10日、「大阪の障害児教育をよくする会」をはじめ、「大阪府立高校30人学級をすすめる会」「大阪市立高校30人学級をすすめる会」「大阪私学助成をすすめる会」「子どもと教育・文化を守る大阪府民会議」の5団体が共同で毎年とりくんでいる教育全国署名のスタート集会が開催されました。

記念講演のほか、各団体からのとりくみの報告、最後に行動提起を参加者で確認しました。

教育全国署名が国を動かす力に

開会あいさつをおこなった「大阪私学助成をすすめる会」の西川副会長は、「全国で私学と公立、障害児教育など、5団体でとりくみをすすめているのは全国で大阪だけです。長年積み上げてきた署名で少人数学級など、教育条件整備をすすめてきました。今年もがんばっていきましょう」と呼びかけました。

教育機関への公的財政支出の対GDP比をOECD加盟国平均の4.2%まで引き上げれば、幼稚園から大学までの教育の無償化は可能」と述べました。その上で、「子どもたちが安心して学べる教育条件を求めて、父母・生徒・教職員・地域が一体になって、とりくみをすすめる、すべての子どもたちへの学び・成長を社会全体で支えるという世論をひろげよう」と力強く決意を語りました。



講演する馬場野さん

記念講演は、「教育相談活動から見える子どもたち、保護者、学校」と題して、馬場野成和さん（元八尾市小学校教諭、教育相談おさか相談員）がおこないました。

馬場野さんは、冒頭、「親や大人は子どもたちの気持ちを大切に、子どもにとつて良かれと思っているんことをしているけれど、学校では教師も一所懸命がんばっているけれど、本当に子どもの気持ちを考えていると言えるのでしょうか」と問題提起しました。

講演では、教育相談や交流会などで聞いた子どもたちの思いや学校に行けなかった子どもたちとその保護者の声を紹介しながら、子どもたちや保護者の思いや願いとともに学校の在り方について参加者で考え合いました。

子どもたちの声「声が大きくて、先生が話すといつもビクツとする。命令みたい」「（先生は）ずっと怖い顔をしているから話しかけられない」「（不登校から）学童や適応指導教室に通いだすと、次は教室に行くように言われる。大きなプレッシャーでしんどくなった」「（不登校になったとき）先生は何かしなければいけないと思っっているいろやってくれるが、正直何もしないでいい」「（教師として）仕事でやるのではなく、何よりも関わっている子どもに興味をもってほしい」

保護者の声「先生も評価され、以前より厳しく管理的になっている」「もうそろそろ動き出してもいいんじゃないか、家の居心地がいいからだめなんじゃないか、お金に困ったら何か始めるんじゃないかと思っつてしまっ」「お母さん、もう関わらんでいいよ」って娘に言われ衝撃だったが、子離れができていないのが親だと気付いた

青年部主催

ソフトボール大会

- ①9月14日（土）交野支援四條畷校
- ②9月16日（月祝）難波支援学校
- ③9月21日（土）堺聴覚支援学校
- ④10月20日（日）泉南支援学校



○いずれの会場も9時集合、9時半開会です。
○雨天の場合は中止です。朝7時の時点で各分会の窓口ご連絡します。（天候によっては、前日判断の場合もあり）

9月青年部委員会：9月12日（木）19:30～
たかつガーデン705

大会に参加する分会は必ず出席してください。

これらの声を紹介し、「子どもたちの声をしっかりと受け止め、私たち大人は『こんな教育・学校でいいの』と声をあげ、『行ってみたい学校・行かせたい学校』『子どもたちが生き生きとし、創造力を発揮できる学校』をつくっていきたいです」と語りました。そして、「いま重要だと思うことは、子ども・保護者・教職員一人ひとりが人間として成長・発達・暮らしていける教育条件・労働条件・生活社会環境を作っていくことです。教育全国署名を大きな運動としてとりくみましょう」と講演をしめくりました。